

オックスフォード大学中東研究センター

The Middle East Centre of St. Antony's College, University of Oxford

本年5月24日から26日の間、3年ぶりにオックスフォード大学の中東研究センター(The Middle East Centre of St. Antony's College, University of Oxford)を訪れた。わずか3日間の滞在であったが、Dr. E. R. J. Owen, Dr. D. Hopwood, Dr. R. Mabro, Miss E. Monroe, Dr. P. K. O'Brien(注1)といった旧知のひとと、それに新たに知り合った Mr. S. Radwan 等の尽力によって、オックスフォード大学における現代中東研究(Modern Middle Eastern Studies)(注2)の現状について貴重な情報を得ることができた。

中東研究センターの所長 Dr. A. Hourani は、たまたまアメリカ出張中のため留守であったが、Dr. A. Hourani の退職は間近にせまっており、センターの活動は次期所長に想定されている Dr. E. R. J. Owen を軸に展開されている。第2次大戦の当時、キプロス駐屯英軍の一員として中東に過ごし、それを契機にして現代中東研究への眼を開かれたという Dr. E. R. J. Owen は、センターの研究活動と行政の両面にわたる中心人物に適わしく、古武士的風格のなかにある種の余裕と鋭さを蔵している。ロンドン大学の某氏は、「オーエンを中心とするオックスフォードの自由将校団」と、ナセルと自由将校団に擬してこれを評していた。

3日という束の間の滞在であった上に、筆者のヒヤリング能力の不足もわざわざいって、あるいはセンターを軸とするオックスフォード大学の現代中東研究の細部について聞きまちがいがあつたかも知れないが、大筋についてはほぼ誤りなく理解できたつもりである。センターを中心とする現代中東研究の現状から、われわれの将来の方向を考える糧として何をすることができるか——このようなアングルからみた印象記をとりまとめれば、大よそ次のようになる。

(注1) O'Brien は *The Revolution in Egypt's Economic System*, 1966で著名な人。しかし比較経済史を主題とし、現在はイタリア経済史を研究中で、センター固有のスタッフではない。

(注2) Modern は2通りの意味で使われている。

Oriental Studies & Modern History あるいは Modern History という場合には、18世紀以前の「近世史」の意味であり、Social Studies のなかでの Modern History, Modern Politics 等々は19世紀以後の「近代史」あるいは「現代史」の意味である。

I 中東研究センター設立の趣旨

中東研究センターは、設立当初からオックスフォード大学全体の現代中東研究の中軸として位置づけられていたし、現在においてはなおさらそうである。St. Antony's College に中東研究センターが設立されたのは1955年であるから、予想以上に若いセンターであるが、過去17年間の拡充はまことに地味で着実である。

もともと中東センターが設立された趣旨は、(1)オックスフォード大学の各学科、各カレッジにおける現代中東研究に関する研究・講義・学生指導を補完し、(2)現代史、現代政治・経済、現代文化の領域をカバーする資料センターとしての機能を果たし、(3)大学全体のスタッフ・学生に共同利用施設の便宜および研究資金の供与を行ない、(4)ひろく内外の研究者・学生に現代中東研究のための学問的環境を提供しようというところにあつた。こう書けば、Dr. A. Hourani の所長就任と Hayter Report が偶然のように一本の糸で結ばれており、センターの飛躍的拡充にとって一時期を画したのが両者であったといっても、当然のこととして誰もが首肯するであろう。

センターの飛躍的拡充期は、1962~67年である。センターが Hayter Report の趣旨を先取りした形で設立され、また Dr. A. Hourani によってそのような方向で運営されていただけに、この第1期の5カ年間に現在の姿をほとんど一挙に完成できたとしても決して不思議ではない(注1)。

Hayter Report のねらいは、(i) 東洋研究(Oriental Studies)を、諸科学・専門領域から孤立した秘儀・秘伝としてではなく、諸科学・専門領域の部分として密着させること、(ii) スタッフも学生も、地域と言語に関する知識を習得するとともに、諸科学・専門領域の知識を体得

すること、(イ)東洋研究学科のみならず、諸科学・専門領域の学科に「東洋研究」の場を設定すること、(ニ)「東洋研究」においては、遠い過去(18世紀以前を指す)よりも現代(19世紀以後を指す)の歴史、社会、文化等に関心をはらうこと、等に要約できるであろう(注2)。Dr. A. Houraniはこの方向づけに沿って、むしろ先取りしてセンターを指導してきたのである。

(注1) *University of Oxford, Oriental, Slavonic, East European, and African Studies*, 1969, pp. 1-14 参照。

(注2) *University Grants Committee, Report of the Sub-Committee on Oriental, Slavonic, East European, and African Studies* (Chairman: Sir William Hayter), H. M. S. O., 1961。

この通称 Hayter Report については、林武氏の紹介を参照(「現代地域研究論」アジア経済研究所 調査研究部所内資料 No. 43-48 イスラム研究会 No. 5 101ページ 1969年3月)。

II シニア・スタッフの拡充

Hayter Report にもとづく資金の導入によって、まず「バランスのとれたシニア・スタッフの構成」をめざして、新たに5人のスタッフが第1期の5か年間に任命された。かれらにはまた在外研究の機会が与えられた。その5名は次のとおりである。

Modern Arabic (Oriental Studies): Dr. M. M. Badawi

Turkish History (Oriental Studies & Modern History): Dr. R. C. Repp

Persian History (Oriental Studies & Modern History): Dr. J. D. Gurney

Middle Eastern Sociology (Anthropology & Geography): Dr. P. A. Lienhardt

Economic History of the Middle East (Social Studies): Dr. E. R. J. Owen

そして1967~72年の第2期の5か年間に、Geography (Anthropology & Geography) と Economics (Social Studies) の一つのポストが用意され、Dr. R. Mabro が School of Oriental & African Studies, University of London から移籍された。なお Geography は欠員のままだになっている。

第2期の最終的なシニア・スタッフの構成は、次のように想定されていた(注1)。

Oriental Studies	…… 1名
Oriental Studies & Modern History	…… 3名
Anthropology & Geography	…… 2名
Social Studies	…… 2名
Middle Eastern Bibliographer	…… 1名

しかし実際には、現在のシニア・スタッフの構成は次に示すとおりであって、部門別にみて想定図との間にずれがある。予算・制度上の部門と実際のスタッフの領域との間のずれはどこにでもみられる現象であって、そのこと自体とりたててというほどのものではない。しかし Anthropology & Geography 部門の欠員は、シニア・スタッフの構成からみて多少問題であろう。Dr. P. A. Lienhardtの名は、オックスフォード大学全体の現代中東研究大学院生の指導教官リストに挙げられているが、センターのスタッフ名簿(1970/71年)から落ちている(注2)。しかし Dr. D. Hopwoodによれば、現在 Dr. P. Lienhardt は所属のスタッフであり、欠員は1名とのものであった。

Oriental Studies (Dr. M. M. Badawi)

Oriental Studies & Modern History (Dr. A. Hourani, Dr. G. L. Lewis, Dr. J. D. Gurney)

Anthropology & Geography (Dr. P. A. Lienhardt, 他1名欠員)

Social Studies (Dr. E. R. J. Owen, Dr. R. Mabro, Miss E. Monroe)

Middle Eastern Bibliographer (Dr. D. Hopwood)

(注1) *Univ. of Oxford, Oriental, Slavonic...*, 1969, pp. 6-7. 参照。

(注2) シニア・スタッフ、シニア客員スタッフの氏名、最近の研究主題、発表論文等については、*St. Antony's College, Oxford, Report on Middle Eastern Studies for the Year 1 July 1970-30 June, 1971*を参照。

III 現代中東研究の大学院生

オックスフォード大学で Modern Middle Eastern Studies を専攻する(あるいは卒論のテーマとする)大学院生の数は、年によって多少の増減があるが、最近の数年間では40~50名程度とみてよい。1968/69年には、45名であり、その内訳は次のようである(注1)。

Oriental Studies ……12名

Oriental Studies & Modern History ……7名

Anthropology & Geography ……11名

(社会人類学8名、地理3名)

研究機関紹介

Social Studies …13名
(政治5名, 経済8名)

Agriculture & Forestry …2名

1972年の Trinity Term では, 59名であり, その内訳は次のようである(注2)。

Oriental Studies …27名

Oriental Studies & Modern History …4名

Anthropology & Geography …7名
(人類学6名, 地理1名)

Social Studies …21名
(政治11名, 経済10名)

部門別にみた場合, 年による凸凹がかなりいちじるしいが, 必要以上に学生の領域選択に制限はしていない。また Social Studies のなかみは, むしろ 政治史, 経済史の多いのが目だつ。

大学院生に関して二つの大きな問題がある。(イ)学生の過半数が非英国人であること, (ロ)博士号取得の困難と研究職・大学教職ポストの不足。前者については, 従来から SOAS の国籍別学生構成がしばしば指摘されていたが, オックスフォード大学の現代中東研究も同様の傾向にある。ちなみに, 現在中東研究センターあずかりの大学院生19名についてみれば, イギリス6名, 欧米5名(アメリカ4名, ドイツ1名), 中東諸国8名(エジプト2名, イスラエル, イラン, イラク, クェート, サウジアラビア, レバノン各1名)である。

後者については, 博士課程修了後, 大学研究機関のポストを得る機会がきわめて少なく, 学究を志す大学院生の士気に大きな影響があるといわれている。ちなみに, 昨年中東センターにて博士課程を修了した5名は, すべて放送局, 石油会社, ブリテッシュ・カウンスル等に就職しており, 必ずしも彼等の希望がみたされたとはいえない模様である。また中東研究は, 日本研究や中国研究とならんで, 博士号取得が困難なコースであり, 言語と専門領域の両方をこなして博士号をとるには, まず10年はかかるといわれている。現代中東研究を志望するイギリス人が次第に先細りになったとしてもやむをえない実情のようである。あるいは, このような悲観論は, 当事者たちのあせりであって, あたり前といえばそれまでのことであろう。

(注1) 前掲 *Univ. of Oxford, Oriental, Slavonic...*, 1969, pp. 9—10.

(注2) *University of Oxford, Graduate Studies, Trinity Term 1972* (Oxford University Gazette,

Graduate Studies Supplement), 1972 より算出。

IV ライブラリの活動

中東研究センターのライブラリは, 19世紀以後の現代中東研究に大部分向けられている。3年前に比べると, 資料室もはるかに整備された。現在の蔵書数は約16,500点で, 英語と現地語の単行書がそのほとんどを占めている。年間の単行書購入費は3500英ポンドであるから, さして大きいとはいえない。しかし現地に資料収集員をもっているだけに, 最低限必要な現地資料は収められている。また各カレッジの図書館, とくに Oriental Institute (18世紀以前に主力) や Bodleian Library に関係の蔵書があり, この2者はオックスフォード大学の中東関係資料の Union Catalogue によって St. Antony's College と連絡されている。Dr. D. Hopwood は, センターの資料責任者であり, かつ Union Catalogue 作成の中心メンバーであり, また Cambridge, Durham, Edinburgh, Leeds, London, Manchester, Oxford, St. Andrews の8大学からなる Middle Eastern Libraries Committee の事務局長でもある。また中東研究センターは, Private Papers Collection をもち, 19世紀以後の中東在住イギリス官吏, 学者等の記録や手記の発掘につとめている。この分野は Miss E. Monroe が中心である(注1)。

(注1) 前掲 *St. Antony's College, Oxford, Report on Middle Eastern Studies*, pp. 5—6.

V そ の 他

紙数の都合から, 大学院生に与えられる入門書リストとセミナー活動についてのみふれておこう。

現代中東研究を志す大学院生に与えられる入門書のリストは, かなり大きいので全体の紹介はできない。しかし, もし国としてエジプト, 部門として Social Studies をえらぶ学生であれば, 中東の概観書の他に次のようなものが約40点ほど入門書として指示されている。但し, 各指導教官は, 別途に学生の専攻に応じたリストを指示している。

C. P. Harris, *Nationalism and Revolution in Egypt*, 1964.

R. P. Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, 1969.

P. J. Vatikiotis, *The Egyptian Army in Politics*, 1961.

- A. Lutfi al-Sayyid, *Egypt and Cromer*, 1968.
 R. L. Tignor, *Modernization and British Colonial Rule in Egypt*, 1966.
 P. J. Vatikiotis, *The Modern History of Egypt*, 1969.
 M. Y. Zayid, *Egypt's Struggle for Independence*, 1965.
 N. Safran, *Egypt in Search of Political Community*, 1961.
 J. M. Ahmad, *The Intellectual Origins of Egyptian Nationalism*, 1960.
 P. Mansfield, *Nasser's Egypt* (2nd ed.), 1969.
 P. J. Vatikiotis, *Egypt since the Revolution*, 1968.
 K. Wheelock, *Nasser's New Egypt*, 1960.
 P. M. Holt, *A Modern History of the Sudan*, 1961.
 P. M. Holt, *The Mahdist State in the Sudan*, 1958.
 J. Marlowe, *Cromer in Egypt*, 1970.
 W. R. Polk, *Beginnings of Modernization in the Middle East*, 1968.
 Z. Y. Hershlag, *Introduction to the Modern Economic History of the Middle East*, 1964.
 C. Issawi, *The Economic History of the Middle East*, 1966.
 M. A. Cook, *Studies in the Economic History of the Middle East*, 1970.
 M. Halpern, *The Politics of Social Change in the Middle East*, 1963.
 L. Binder, *The Ideological Revolution in the Middle East*, 1964.
 K. H. Karpat, *Political and Social Thought in the Contemporary Middle East*, 1968.
 M. Kerr, *The Arab Cold War*, 1965.
 S. H. Longrigg, *Oil in the Middle East* (3rd ed.), 1968.
 C. Issawi, *The Economics of Middle Eastern Oil*, 1962.

(以下割愛)

最後に主要なセミナーについてふれておこう(1971/72年度)。

(1) 全学期を通して、毎週1回、現代史および現状分析についてセミナーが行なわれる。責任者は、Dr. A. Hourani, Dr. D. Hopwood, Dr. R. Mabro の3名。

(2) 石油問題の特別セミナー。責任者は、Miss E. Monroe, Dr. R. Mabro, Mr. A. Verrier (Senior Associate Member) の3名。

(3) 中近東史の特別コンファレンス。主題は、18世紀の中東。1973年に、マムルーク時代の中東史という主題で特別セミナーが準備されている。責任者は Dr. E. R. J. Owen。

まことにシニア・スタッフは、自分自身の研究、学生の指導・講義セミナー等々、席をあたためる暇もないほど多忙である。連日のように。

(注1) 前掲 *St. Antony's College, Oxford, Report on Middle Eastern Studies*, pp. 6-7 および Appendix A 参照。

(在ロンドン海外調査員 中岡三益)